

もしかして俺って最強？ I N、A R C—V！

征竜でファンデッカー狩りしたいから返して

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

許可は貰ってないぞ（笑）

ARCVはシンクロ次元編があれだったので途中できった。

GXを汚されて激おこぷんぷんまる、これが俺の復讐だ！

あ、よくあるオリ主ものです。

目次

遙かなる遠い世界で

「いくぜ！俺はエクステンジを発動！」

「エクステンジ…？」

今日も楽しくフリー戦だ。相手は小学生である。

1人でパックをむきむきしてたので声を掛けたところ、了承を得ることができた。

客は俺らしいかないで大声を出しながらプレイする。店長が迷惑そうな顔をしてるが無視である。

大体、決闘者とはマナーが悪いのだ。

「知らないのか？簡単に言うとお互いの手札を交換するカードだぜえ。」

「へえ…初めてみるなあ。はい、これが僕の手札だよ！」

「どれどれ…」

どうやら彼のデッキは「ガーディアン」らしい。中々良いデッキだ。それよりも俺は1つのカードに目を奪われた。幽鬼うさぎがいたのである。

幽鬼うさぎ、かなりのレアカードだ。手札誘発のカードでかなり優秀だ。ちなみに俺は2枚しか持っていない。

最近の小学生は金持ちだな…。ヴェーラーとうさぎで分かれるが、俺はうさぎのほうが好みだ。

クリフオートツールにうさぎを打たれて、リアルファイトになり出禁になった決闘者がいるのは作者もドン引きした実話である。

「うさぎを貰うよ。」

「……事故ってるのにうさぎでいいの？なら僕は死者蘇生を貰うね。」

「はは、ハンデだよ。」

ちなみに手札はツイインツイ×2、死者蘇生、同法の絆である。平常運転なので気にしてはいない。

リストバンドにカードは仕込んであるのでシャイニングドロ―(偽)はいつでも可能だ。

「よし……ここからは……あ！ちよつとごめんね。電話掛かってきたからちよつと出てくるね。」

「あ、うん。いいよ。」

デツキは置いて行くから見張つててねー。と言うと元気な返事が聞こえてきた。

ちなみに電話の件は嘘だ。そもそも決闘なんてちゃんとやる気はない。目当てのうさぎが手に入ったので、もう彼に用はない。

デツキは置いてきたが問題ない。あれはプロキシ……ただのカラーコピーなのだ。いくらでも作れる。

こここのカードショップも他県から来てるので問題はないだろう。監視カメラもなかった。完全犯罪である。

「へへ……悪く思うなよ。」

「おい……」

さっさと逃げようとレンタルした自転車に乗り逃げようとしたところで原付にのつた男に声を掛けられた。

デカイ。これが第一印象だ。座っているのに俺よりデカく見える。身長は180cm以上はありそうだ。

「ああん？なんだお前は？」

「決闘しろよ。俺が勝ったら彼にうさぎを返せ。」

「チツ！見てる奴がいたのか！」

どうやら世の中はそううまくいかないらしい。ペダルに足を叩き付ける。

そして流れるような動きでスマホを操作し、決闘モードに変化させると愛用のデツキをセットした。

今回はプロキシではない俺自身のデツキだ。少しばかり時代遅れかもしれないが環境デツキが相手でもワンキルはされないだろう。

「自転車でライディングデュエルだと!?ふぎけやがって！」

「原付も可笑しいけどな！だが俺に合わせてすぐ準備をしているとは見事だ…じゃあ…ツツ！」

「決闘！」

こうして決闘が始まった。通勤ラッシュだが熱き決闘者にはそんなことは関係ない。

信号を先に曲がったほうが先行だ。俺は自転車であつちちは原付。早いのは常識的に考えて向こうだが、俺のほうが早かった。

「馬鹿な！それは電動自転車ではない。ただのママチャリのはずだ！」

「タワケが！こちとら身長を伸ばすためにジャンピングスクワットを週3でやってんだぞ！」

ちなみに現在162cm効果はまだ出ていない。

決闘は先行が有利である。ジャンケンが本番であとはオマケと言われているレベルだ。

しかし例え架空の存在でも俺を救ってくれた唯一無二の相棒なのだ…それを今、失ってしまった。

「よくも……相棒を…絶対に許さねえぞ、ドン・サウザン ドオオオオオツ!!」

「今のマインドクラッシュにより、スピード・ワールド17にカウンターが1062個乗るぜ！」

「!?しまったそいつの効果は…」

思考をすぐに切り替える。所詮あの人格とは10分程度の付き合いだ。虐めなんてなかった。

それより問題はスピード・ワールド17（長いから7に省略）の効果だ。カウンターが12個以上乗るなんて滅多にないが、例外はいつだってあるもんだ。

「7をゲームから除外し、お前の手札をすべて墓地に送るぜ！」

「考えたな、ちくしょう！」

マインドクラッシュをくらったときにコツソリ2枚ドローしてたのだが墓地にすべて送られてしまった。

いま発動できるカードは一枚も落ちていない。俺のデッキがインフェルニティだったら次のターントップデーモンで何とかなかったかもしれないが、インフェルニティは崩してしまったのでそれはない。チェイン返してくださあ。

「ターン…エンドだ…」

「サレンダーはしない…か。ならば遠慮なくいくぞ。ドロー！」

相手の手札が6枚になる。反則はしないか…まあ当たり前だ。

だが勝負はまだわからない。相手が事故ったりする可能性もあるし、もし奴のデッキが壊獣などならこのターンは何もできないはずだ。まだ勝負はわからない。

「俺はゲール・グドラを召喚！攻撃表示！そのままLP3000払い、効果を発動！」

「ふっ…碌なカードを引けなかつたらしいな！」

ドン・サウザンド LP8000→LP5000

「融合デッキ…つまりエクストラデッキからモンスターを墓地に送る！送ったのは虹光の宣告者だ！」

「さらに墓地に送った虹光の宣告者の効果だ！儀式魔法か儀式モンスターを手札に加える！」

「儀式…読めたぞ！お前のデッキは【影憑依】だな！」

「そろそろ赤信号になりそうだから止まれよ。手札に加えるのは高等儀式術だ！」

赤信号にぶつかったので止まる。それにしても奴が手札に加えたカードだが影憑依に入るのだろうか？

あまり詳しくないが影憑依はサーチ手段が豊富だ。わざわざライフ3000も払ってサーチする必要はあるのか…

わからない。影憑依が環境の頃はガチ決闘者たちをリアルファイトで闇討ちしてたのであまり対戦経験がない。

「さらにゲール・グドラの効果をまた発動！落とすのは二枚目の虹光

の宣告者だ！」

ドン・サウザンドLP5000↓LP3000

「ターン1じゃないのか…それにしてもなぜそこまでゲール・グドラに拘るんだ？」

「すぐわかる…手札に加えるのはブルーアイズ・カオス・MAXマックス・ドラゴンだ！」

「なん…だと…」

ブルーアイズ・カオス・MAXマックス・ドラゴン…映画の奴じゃないか！

効果はしらないが欲しい。あとでくれないかな？映画は因みに見ている。いったいどんな効果なのだ？

「高等儀式術を発動！効果は説明する必要はないな？レベル8の千年原人を墓地に送り…」

「ブルーアイズ・カオス・MAXマックス・ドラゴン！降臨せよ!!!」

「公道でやってんだからあまり大きな声出すなよ。」

常識がないやつだ。出てきたモンスターを見ながらそう思う。

しかしデカいなー全長25mくらいはありそうだ。無料のソリツドビジョンアプリでこれだから有料の奴だともっと大きいのだろう。

どれどれ効果は…え？…まじかよ…

「効果が読めない…！」

「ん？ああすまない。アプリのバージョンが古くてな。後で説明する

ぞ。」

「ちゃんと更新しとけよ…しかし攻撃力もわからないとなると怖いな。」

「巨大化を装備するぞ。ライフがお前より少ないから攻撃力が元々の倍になる。」

「そのためのゲールグドラか…」

だからわざわざあんなサーチをしてたのか。

信号が青になったので進む。足が疲れてしまったのでスピードが落ちてしまったが、アイツは速度を落としてくれた。

後ろの車にクラクションを鳴らされてしまったので万能地雷グレイモヤを投げておく。

直後に爆発音がしたが気のせいだろう。それにしてもコイツいい奴だな。後でL I O EのID交換しようかな。

「んじゃ、バトルフェイズな。カオスMAXでダイレクトだ。」

「墓地に止めるカードはない。通すぜ。」

「おkあとコイツの今の攻撃力は…」

「8000だ!」

あ??

惚けてると、カオスMAXの口が開きしゅいんしゅいんと音が鳴り響いた。

コイツ…クズだ!ワンキルなんて人間のやることじゃねえ!

「ちつくしよおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおお！」

「ハハハハ！吹き飛ばー！ちなみに敗者には罰ゲームとして遊戯王一の
駄作にトリップしてもらおうぞ!!」

「ふざけんじやねえええええええええええええええええええええええ
!!!」

「神様転生よりマシだろ！吹き飛ばー！カオスビィィィィィィィィィィ
ィィィィィィィィィィィィィィィィム!!」

こうして俺は後ろにあつたセブ〇イレ〇ンを巻き込みながらA R
C―Vに飛ばされるのであつた。